



## 情報通信の移り変わり

北陸支部長 畔上修一

情報通信の分野に身を置くものとしていつも感じていることですが、情報通信技術及びそれにまつわるサービス、製品の移り変わりには目まぐるしいものがあります。情報通信分野でしばしば用いられるドッグイヤー、マウスイヤーなる表現も、そのことを物語っているように感じます。しかしながら、新しい技術や製品が世の中に出たということだけでは本当の意味で情報通信の変遷とはいえないように思います。新聞、雑誌等のメディアでは目にしたとしても、一般の人々にはまだまだ実感がわくわけでもなく、ましてや必要性に迫られる感じなど全くなく、「へえー」とか「ふーん」といった意識で終わっているのではないのでしょうか？

私が以前、開発者の端くれとして某研究所に在籍していたころは、ちょうどインターネット上で音楽／映像配信ソフト、あるいはIP電話ソフトのはしりが世界に出回り始めた時代でした。私が在籍していたプロジェクトでも同様のソフトを開発したり、パソコンがなくてもIP電話が使えるようにとの目的で、固定電話機を接続して使うIP電話用ターミナルアダプタ（TA）なるものを試作したりしました。

当時の経営幹部に対してこれらをデモンストレーションで披露し、「音質は申し分ないが、やや遅延が気になる」といったコメントをもらったことを覚えています。また、TAの製作を某端末メーカーに委託したところ、年季の入ったエンジニアが、はんだごてとオシロスコープ等を駆使して様々な試験データを得るために職人的なチューニングを施していたことが懐かしく思い出されます。

あれから約15年の月日が流れ、今、私の自宅では光ファイバに接続されたTAなるものに家庭用FAXがつながっています。この光景を見ると時折、やっと一般家庭に普及するに至ったかとの思いがこみ上げるとともに、ここまでに至る間、各キャリア、メーカー、技術者、サービス開発者等において、様々な苦勞、葛藤、競争が起こり、それをくぐり抜けてやっと日常の道具に行き着いたのだろうと感慨深い思いに駆られます。

日本の今後の情報通信を想定する上で、政府の情報通信に取り組むプランが一つの参考になると考えます。これまで、e-Japan、e-Japan IIでは、ブロードバンド等のインフラ整備を中心に進め、u-JapanではICTが草の根のように生活の隅々まで溶け込むことを目指したシームレスな利用環境整備を進めてきました。

今後は、21世紀における山積みとなった社会課題を解決するために、ICTの積極的かつ創意ある利活用が期待されています。

ここ最近の現象を見ても、スマートフォンがやはり、クラウドサービスに期待がかかり、新たな局面を迎えているのだろうかとか期待感が高まりますが、一般の人々が必要に迫られ、使いこなす普及期を迎える次なるサービス、製品はいかなるものか？

未知なるものにわくわくしますが、意外にも前述のIP電話のごとく、いきなり現れるものではなく、もう我々の目の前に姿を現しているものなのかもしれません。